



1-1 受賞を共に喜ぶ(施設長さんと)



1-2 よき理解者に囲まれた生活

1 第21回 熟年メッセージ大会 はつらつ賞 受賞

「人生百年時代」ともいわれ、百歳以上の長寿者は珍しい昨今です。でも、元気に活動している人は必ずしも多くなく、認知症を患ったり寝たきりに近い状態の人が残念ながら少なくないのが現状ではないでしょうか。

今回紹介する木下富砂子さんは、念のための介添えは必要ながらくしゃくたる立ち居振る舞いで、昨年9月(令和2年)99歳の敬老会で手品を披露されたそうですし、100歳になられた今でもマージャンがご趣味だそうです。今回第21回静岡県すこやか長寿祭熟年メッセージ大会に、「九十九歳の恋唄」という作品を出品され、みごとに「はつらつ賞」を受賞されました。失礼ながら、お年を感じさせない情熱的な筆致の文章でつづられています。佐々木審査委員長も、「父(夫)への愛情溢れる作品である。父さんが元気だった頃の思い出、愛情、そして感謝の気持ちと、今も変わらぬ愛情が力強く感じられる。そして、次の旅先で、父さんに会いたい気持ちが伝わってくる作品である。」と講評しています。木下さんは作品創作意欲が盛んな方で、「もっと書きたい」とさらに上を目指しておられることが感じられました。



2 記憶を流暢に語る

2 記憶力に長けた方で、思い出などをありありと詳らかに表現

過去の記憶なのに、目の前で起きていることのように、ありありとよどみなく話してくれました。波乱万丈の生活を送られてこられたようで、「戦時中(第二次世界大戦中)は徐州(中国)に暮らした。」そうです。木下さんはその後の変遷を経て、1960年(昭和35年)に静岡で美容院を開かれました。「静岡浅間神社近く、長谷通りにその美容院はあった。20年程経営された後、息子さんのお嫁さんに店を譲った。」と説明してくれました。「その美容院には3畳ほどしかない住居が付いていたが、寝るときは、部屋には私たち二人(夫婦)が寝る余裕はなく、子どもたちの寝るのがやっとの広さであった。しかし、店は繁昌していた。」と話されました。



3 旅が趣味

3 印象的、思い出深い旅行

お二人とも旅行が趣味で、日本各地を回られただけでなく、海外旅行も数多くされているようなので、どこが印象的だったか聞いたところ、「マチュピチュ(ペルー)」との返事でした。「マチュピチュはクスコからバスと電車を乗り継いで行った先にあった。その遺跡は山に囲まれた中に築かれていて風景が素晴らしかった。また、そこに築かれた砦の址からは、一時栄えた文明が滅びていった民族の悲哀が感じられた。」とも述懐されていました。そして、「現地で案内してくれた人は、余りにマチュピチュに溶け込んでいるように感じられたので現地人かと思ったが、よくよく聞いてみると日本人であった。」そうです。

これまでの楽しい思い出の中で、何が最高であったか尋ねたところ、「敦煌(中国)」と、やはり海外旅行の一つを挙げてくださった。そのどこが良かったかについて、「敦煌は砂山・砂漠が広がる地域で、軍隊の駐屯地が設けられ、戦争に明け暮れた時代もあった場所でもある。」と説明してくれました。それに、「ラクダは、人間が乗りやすいように脚をたたんで背を低くしてくれた。」とラクダに乗った時の状況も話してくれました。敦煌のことを思い出しながら、『枯れすすきの歌(船頭小唄)』と『月の砂漠』の歌を挙げておられて、『月の砂漠』は歌って聞かせてくれました。二つの歌は共に哀調を帯びていますが、これらの旅行先からも悲哀のようなものを感じておられるようでした。



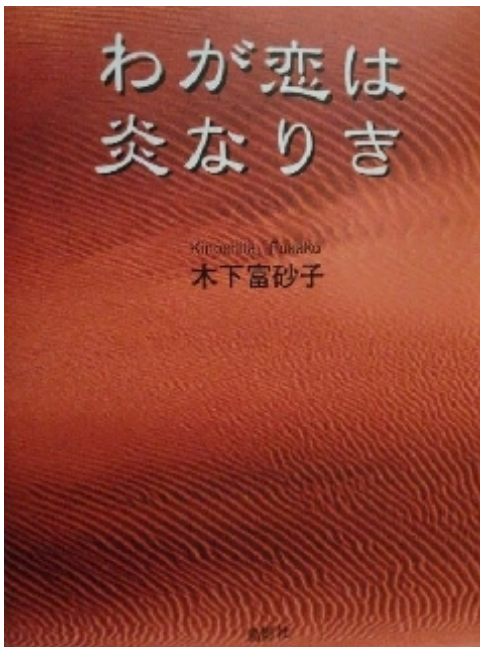
4 最愛のご主人の思い出を聞く

4 最愛の亡きご主人さんに感謝する日々

在りし日のご主人(八郎さん)が口癖のようにおっしゃっていた言葉が、「金を残さないで、思い出を残そう。」でした。また、有言実行の方で、「ほうほう旅行したのもその表れ。」と説明してくれました。戦時中から戦後の混乱期の苦渋の中を生き抜いてこられた二人ですが、助け合いながらも楽しい思い出をいっぱい残せたのは、このような生活目標を明確に持っておられたからでしょう。木下さんのお元気な源やお二人の長寿の秘訣はこの辺にあるように感じられます。

受賞作品『九十九歳の恋唄』に記されたご主人(八郎さん)の詩の後に、「私は惚れられたのです。でも、今更ですが、私も惚れていたのだと思います。」と添え書きをされているように相思相愛の中でした。さらに、この作品の中で美容院の経営について、「花も実もある人生を捨てて、私が始めた小さな美容院の裏方に徹してくれました。」と、八郎さんへの感謝の言葉を述べています。感心するのは、お互いをよく知り、良い理解者であり、かつ感謝の気持ちが深いことです。

それにご主人(八郎さん)の優れている点は、奉仕の精神が旺盛な方で、「お金は孤児院に寄付して、バス二台借り切って、社員を付き添わせて、富士山の五合目で遊ばせました。」とも記しています。世間で揶揄する単なる「髪結いの亭主」ではなく、独立自尊の精神と思いやりのある方だったようです。「父さん(八郎さん)、正に男の中の男でした」と惚れたのも理解できます。



5 『わが恋は炎なりき』

5 木下富砂子さんの著書『わが恋は炎なりき』の引用

木下富砂子さんは、自著の『わが恋は炎なりき』を読むようにと貸してくれました。この本は実在の人物をモデルにした小説です。興味深い内容が書かれていたので一晩で読了しました。まず印象に残った箇所は、中国の徐州からの引き上げに際してのくだりで、「所持金千円を渡され、金目の物はすべて没収されるとは予想外で、まさに着のみ着のまま、乞食同然。しかし、それもこれも、いずれも同じ秋の夕暮れってことで気も狂わず、飢えもせず……。」と、筆舌に尽くしがたい辛酸を舐めることになるが、「神のご加護か日本の土を踏む。」ことがかありません。木下さんの泰然自若とした態度はこのような経験で磨かれたのかとも。

次に印象に残った箇所は、「おれは言いつくして、言葉を無くし、黙りこんだ。恵兄は無言のままだった。これだけ頼んでも駄目なのか。ふっと息をついて、おれは泣き出してしまった。(中略)来月の封切りが1本ある。前借りができる。送るよ。お前の住所は？」と記されています。説明が後になりましたが、主人公(八郎さんがモデル)が恵兄(天才的な映画監督として名高い故木下恵介氏)に生活費を無心に行った時の模様がつづられています。つまり、現実世界において故木下恵介氏は八郎さんのお兄さんだった。木下富砂子さんは、「人間・木下恵介」を書きたいと念願していたそうです。木下富砂子さんの木下恵介像はこの部分にある程度表現されているように思います。

そしてこの小説は次のように結んでいます。

わが恋は炎なりき
現身(うつせみ)に燃えていくとせ
限りある命と知るや
果てもなき旅路と知るや
わが恋は永遠(とわ)に消えなん
君慕いて永遠に行きなん

蛇足ですが、この詩は小説『わが恋は炎なりき』の中で、主人公(八郎さん)がひろ子さん(木下富砂子さん)に贈ったものです。



6 ご夫婦での沖縄旅行

6 八郎さんの思い出の詩

八郎さんの自由詩を2編紹介させていただきます。

○ その1

桜吹雪は夢の色、
夏の砂浜君故に、紅燃ゆる恋の色、
小雪しんしん白い詩、強く吹く風どんな色
秋に吹く風何の色、私を泣かせて過ぎる色

○ その2

春は万朶(ばんだ)の彼方に散って一弁の夢を残し、
夏は積雲の果てに消えて焦躁を留む
秋は無量の行方を語り肅々と心裏(しんり)を捕(う)ち
冬は寂寥の影を落して土壤の黒に染む
あゝ 広大なるかな天地
人、壮なるかな一寸
生と死と悟と諦と

木下富砂子さんはこの詩を額縁に入れて壁に掛けています。この詩を朗読すると、「心が安らぎ生きる意欲が胸の奥に満ちて来ます。」と述べておられます。

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男